

---

# 失ったモノ

遥風 覇鵠渡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

失ったモノ

### 【Nコード】

N0676F

### 【作者名】

遥風 霸鷲渡

### 【あらすじ】

なんとなく生きる事に疲れていた大介。そんな彼は終電車の中で、気味の悪い『娘さん』に出会うのだが……。

今日も、こんな時間になってしまった。

終電に揺られながら、橋元大介は小さく舌打ちした。

まったく上司って奴は面倒くさい。おごるでもなくダラダラと……。好きでも無い酒に付き合わされる、こっちの身にもなって欲しい。

ふっ、と息をついても慰めてくれる人間は居ない。妙に眩しく感じってしまう車両内には……大介と、隅っこで眠る泥酔した男以外に人は無い。

がたんごとんと独特のリズムに、疲れきった身を任せて真っ暗な外の景色に目を移す。

ああ、明日も早いものにな……と思いながら。

「ねえ、おじさん」

「っ？」

唐突にかけられた女の声に、大介はビクリと肩を縮める。声の方に

目を向けると、これまたびっくり……黒いふさふさのドレスに身を包んだ、白塗りの娘さんが立って居た。

アメリカの人形みたいな気色悪い睫毛<sup>まつげ</sup>、ごつつくて鎖のジャラジャラしているブーツ……夜とは言え暑さの残るプチ熱帯夜には、いささか暑苦しい格好である。

……ドレスの所々に浮かんでいる、血液のしみの様なものも気になる。

血糊<sup>ちのり</sup>だとは思うのだが、中々気持ちの良いものではない。

「ねえ、おじさん」

うだうだ考えている大介に、その娘さんはもう一度声をかける。笑みを含んだ様な気味の悪い声に、身震いしながらも今度は返事をした。

「何か？」

不機嫌で顔を歪めた大介を見て、娘さんは満足そうに笑う。

「隣りに座ってもいい？」

「い自由に」

年齢不詳の若い娘さんは、底光りする瞳で微笑むと遠慮がちにふわっと……すぐ側に腰掛けた。

ああ……まったく今夜は、ついてないな。普通の女の子なら和めるものを……。

おどろおどろしい彼女を横目で盗み見て、奥歯をぎりりと噛み締める。電車はゆっくりと夜の深淵しんえんをつき進んでいく。身中の虫になど気にもとめずに……。

.....

「ああ、それゴスロリっていうんだよ？」

歪いびつなハムエッグのトーストを頬張りながら、一人娘の駒子こまこが言った。

「しずろり？」

みっともなく欠伸あくびをしつつ新聞に目を通していた大介は、しばし顔を上げて駒子の説明を待つ。

「そう、ゴスロリ。結構昔からあるよ？ はつきし言って、やりすぎは引くけど、小物とか可愛いのあるんだよね」

「お前もやってんのか？ 血糊……」

「いやーだから、それやり過ぎの人でしょ！ うっさいなあ」

「ああもう！」と駒子は必死にトーストを食べきる。細い左手首の時計とにらめっこしながら、味噌汁を掻きこんで……目に涙を浮かべながら牛乳パックに口をつけた。

「行儀が悪いっ！」

妻の香苗<sup>かなえ</sup>が駒子の頭をはたく。ぶっ、と口元を押さえる駒子……大介は溜め息をついて立ち上がると、布巾で溢<sup>こぼ</sup>れた牛乳を拭き取る。

「んだよっ、ババア！」

「何だつてええ?!」

二人がドタバタやり始める。

「おい、お前達……」

どうしようかと考えあぐねていると、助け船を出すように呼び鈴がなった。

「あ！ 竜君だ、行つてきまーす」

急にしおらしくなった駒子に、大介は苦笑してしまう。こんなじゃじゃ馬娘も、一人前にお年頃らしい。

「はい、行つてらっしゃい。気をつけて」

母親らしい香苗の声。

大介は椅子に座ると、眼鏡を外して味噌汁をすすった。

ほんのちよつとだけ仲間外れにされた様な、寂しい気分を飲み込むように……。

.....  
がったんごん、がったんごん……。

今夜も終電で、帰途につく。遊び疲れたらしい年若い女の子が、一人隅っこで寝ているだけで、車両内はガラガラだ。

大介はアルコールに毒された頭を振って、押し寄せてくる睡魔と闘う。

終電で寝過ごしたりしたら、最悪だ。

タクシー代程、もったいない金の使い道は無いのだから……。

首をガクガクいわせながら、夢と現の狭間をさまよう。

『橋元おーお前っ、ほんつと使えねえよお』



使えなくて悪かったな、メタボリック部長……。

『橋元さえ、いなけりやあゝ新事業はなあ、上手くいったんだあ』

あんたの失敗だろうがっ、僕になすりつけやがって……。

『だからあ、その年にもなつて平なんだよ、ひ・ら』

仕方がないだろう？　これが……僕の實力なんだからっ。

なんだかなあ……自腹きつて、嫌いな酒飲んで、自身への文句を何故に聞かなければならんだ？　上司の機嫌をとらねばならんだ？

ぐつぐつ沸き上がる感情に、目頭がじんわり熱くなる。

いかん、いかん……悪酔いしてしまったみたいだ。

大介は涙を拭おうと目尻に手をやった。ところが、その手を、ひんやりした女ものの手が掴む。

え？

「おじさんも行こう」

昨日の娘さんの声がしたかと思うと……大介はぐいっと引つ張られた。

「っな？」

「大丈夫、行こう」

有無を言わさぬ平淡な声……。  
ぐいっと、もう一度引つ張られた途端……奈落の底へ落ちてゆく様な感覚がして、大介の意識は遠退いた。

.....

『ねえ、おじさん。ねえ、おじさん』

薄暗い森の中に、僕は立って居た。狂暴に群がる木々の匂いが、頭をくらつかる……。ぼんやり手足の位置を確かめて自分に問い掛ける。

ここは？

僕は？

眉間<sup>みけん</sup>に、しわを寄せても……何も思い出せない。空っぽの頭に苛立った私は、すぐそこにある幹に、頭を打ち付けたい衝動にかられた。

『おじさん、おじさん』

風のざわめく音では無い。誰かが笛を吹いている様な……透明な声が木霊している。

私は、ぼうつと声の源を探した。

『君は？』

枯木が倒れて、広間になっている場所には、見覚えがある様な無いような娘さんが立っていた。

『名前は亡くしたの』

暗い雲の隙間から注ぐ月明かりを、その娘さんは……不自然なくらい綺麗な顔で受け止める。

『なくした?』

私の言葉に娘さんは無表情に頷く。

『じゃあ私は?』

『おじさんは、まだ』

手入れの行き届いた人形みたいな彼女の言葉に、私は顔をしかめた。

頭の中が、もんやりして苛々(いらいら)する。身体があることを忘れそうな不安定な感覚……おまけに自分が誰だかわからない、何をすれば良いのかもわからない……。

『じゃあ、僕は誰なんです?』

不快感をあらわにした僕に、娘さんは赤い唇で弧を描く。

『必要ないよ。おじさんも亡くすんだから……解放されたいんでし

よ？  
』

『解放……？』

何故かその言葉は、甘美な響きを持っていた。

『そう、解放……』

繰り返した娘さんの、やんわりした囁きが……胸の内を支配してゆく。

『逝きましょう？ ついてきて……』

そう微笑らった娘さんは、軽やかに走り出す。僕は、まるで操られる様に……追いかける。

『ねえ、おじさん！ あと一人なの。あと一人殺したら……私も  
やっと逝ける。ねえ、だから手伝ってね』

風の様に駆けながら、こちらに笑みを向ける娘さん。彼女の妖しげな微笑みに引き込まれて、僕は所在のハッキリしない足で、後を追いつける。

蒼い水晶のような満ちた月が……黒いドレスを纏<sup>まと</sup>った、彼女の位置を教えてくれる。

もうどれくらい走ったろう？ 何千本という木々の間を、通り抜けた気がする。しかし、全然息はあがらない。

別に足を動かさなくとも、走れるのではないか？ そう思えるぐらいに飛ぶように進んだ。

『あと、もう少し。ほおうら、あれよ』

娘さんが足を止めて指さした先には、モップみたいな葉っぱに覆われた不健康そうな木があった。

その下で何かが蠢うごめいている。

赤い何かが……。

赤いＴシャツを着た人間が……。

『ほおうら、あいつ。あいつを殺して』

娘さんの囁きに、僕は首を傾げる。

『何か恨みでもあるの？』

僕の質問に、彼女はニッコリ造りものの笑みを浮かべる。

『うん、殺されたの。だから復讐』

『何で自分で殺らないの？』

私の言葉に娘さんは首をふる。

『何度も枕元に立ったのよ。でも、あいつだけは無理だった。だから、生身のおじさんに頼んでるの』

『言ってることがわからない。生身って？』

娘さんは、ニツタリ笑って答えてくれない。

『人殺しなんて出来ない』

『復讐して何が悪いの？』

『しかし……』

『あたしはね、バラバラにされたんだよ？ あいつに殺された時点で、あいつを殺す権利もあるんだから』

ね？ と小首をかしげる彼女に、何か釈然としないものを感じながら



らも、僕は頷いていた。

『はい、じゃあコレ』

娘さんが錆びた丸型シャベルを差し出す。

僕は糸で引つ張られるかの様に、それを取り上げて男の元へと近付いて行く。

『死ね』

僕が出したはずの声は、娘さんのそれそのものだった。

「ぎゃっ」と振り返った男の頭へ、シャベルを力に任せにふりおろした。

枯れ草の上へ倒れこんだ男の腹に、ぐっさりシャベルを打ちこんでやると、娘さんはやっと満足気に拍手した。

『ありがとう。これで逝ける』

そう言って、晴れやかに僕の側までやってくると、赤い唇を額に寄せた。

『約束通り、解放してあげる』

僕の前にもう一人の僕が現れる……。常ならば恐怖しただろうが、もうどうでもよくなっていた。

『じゃあお休み、おじさん』

弾む彼女の声を最後に、僕は真っ暗闇にほつり出された。

.....

ばしんっ……と、虫でも潰す様な衝撃を頬に受け、意識が浮上する。

重い瞼を押し上げると、鬼のような形相の香織が、大介の額を苦々し  
そうに見つめていた。

「か、母さん……？」

大介が片目を見開くと、もう一発頬を叩かれた。

「お父さん、あたしを裏切ったねえっ？」

目を吊り上げた香織は、重低音で喉を震わせる。

ベランダの窓から差し込む、淡い陽光に照らされる寝室。少し肌寒  
いが、いつも通りの朝だ。

大介はヒリツク頬をさすりながら、ぼんやり上体を起こす。

いつの間にベッドに入ったのだろうか？　どうやら昨夜は飲み過ぎた  
ようだ。記憶が曖昧あいまいになるぐらいに……。何か夢を見た気もするの  
だが……。

「お父さんっ、浮気したんでしょう？　おでこに口紅がついてるん  
だから！」

そんなベタな……。

のっそりベッドを離れて、香織のドレッサーの鏡を覗いてみる。

「あれ、本当だ」

大介は無感動に、そう呟いた。

成る程、確かに口紅だ。血の様に深い赤色が、鮮明に唇の形を型どっている。

はて？

「いつの間についたんだろうな？」

とぼける様な大介の態度に、香織は激怒して金切り声をあげる。

「とぼけないで！ 昨日も深夜帰り、この前もそうだったじゃないっ？」

大介は両の掌てのひらを香織に向けて、まあまあと苦笑いする。

「本当に上司に付き合わされてるんだって。浜地部長の奥さんに、確認してみてくださいよ」

『浜地』の名を聞いた香織は、唇を歪めてそっぽをむく。

「嫌よ、あの奥さん。お局気取ってるんだからっ」

「僕だって嫌な思いして、飲んできてるんだよ？ それくらい出来るだろう？」

面倒になって部屋から出ようとした大介を、香織の鋭い視線が制す。

「仮にそうだとしても、その口紅は？ まさかキャバク……」

「居酒屋だから。大体そんなお金持ってないでしょうが……」

「でも……」と続けようとする香織を残して、大介は洗面所に向かう。

蛇口を捻り、勢いよく水を出す。頭のもやがかったものをも洗い流すように、バシャバシャバシャバシャ顔を洗った。

そうして鏡に映った顔は、何かの抜け殻の様に見えた。

「それでね、後藤さんったらっ……」

午後七時。

ニュースに集中しながら高野豆腐をつつく大介は、機嫌のなおった妻の話に適当な相づちを打っている。

浮気の嫌疑は晴れたらしい。まったく現金なものだ。

それでも腹が立たないのを不思議に思いながら、舌触りの良い米を口に運ぶ。

ニユースキヤスターは、今日も悲惨な出来事が沢山あったのだと……大して感情のこもらない表情で伝えている。女兒殺害、通り魔事件……。

だが、さして何も感じない……僕はこんなに薄情な人間だったのだろうか。

いや違う……昨日まではそうじゃなかった。何かが……足りない？

視線を巡らせ考えてみる。いつもなら断れなかった浜地部長の誘いも、今日は恐れることなくスッパリ断れた。今まで何故そうできなかったのかが、わからない。ただ断る、それだけの事なのに。

『いや、憑物<sup>つきもの</sup>が落ちたようだね。どうしたんだ今日は？』

そう、満面の笑みで大介を讃えたのは……普段は仏頂面をしている明石課長だった。

そつなく返した大介の肩を、  
『浜地と代わって貰おうかな、期待してるよ』

と、ぼんぼん叩いて去って行った。

憑物が落ちた？　誉められた所で何も嬉しくもないのは……どうしてだろう？

わからない……。何か、大事なものを無くした様な気もするのだが……。

僕は何を失ったのだろうか？

「ただいま入りましたニュースです。N県山中にて、男性の変死体が発見されました。なお遺体の下からは、盗難届けの出していた、高額なビスクドールをばらしたものが発見されたため、N県警は……」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0676f/>

---

失ったモノ

2010年10月12日04時32分発行